

## ◆第3回◆

日時：11月3日（土）14：00～16：30

会場：江東区総合区民センター3階第4・5研修室

内容：パネルトーク「障害者の生活を知る～共に生きるために」

パネリスト：新井たかね氏(全国障害児の暮らしの場を考える会会長・

社会福祉法人みぬま福祉会理事)

家平悟氏(NPO法人日本障害者センター事務局長・

障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会事務局次長)

コーディネーター：荒井聰氏

参加者：34名

### ◎パネルトークの主な内容

▼新井氏 「かけがえのない 全ての生命が 輝く社会であるために」

自分を母親であると認識することも難しいような重度の障害のある娘。口蓋裂もあり、脳性麻痺と診断され、「障害を持ちながら幸せに生きていけるのか、生きるより命をなくしてしまった方が幸せなのでは」と思ったこともあります。やまゆり園事件の背景に優性思想があると言われる中、私の中にもそのような思いがあったのです。けれども、娘と40数年間歩む中で、お医者さん、学校の先生、障害のある子どもを持つ保護者の方など、本当にたくさんの方との出会いがあり、その方々の言葉に衝撃を受け、励まされ、娘と向き合って頑張って生きていこうと思えるようになりました。仲間と手をつなぎ、学び合う中で、自分の中にある優性思想的な考え方を一步一步克服してきたのだと気付かされました。

娘は今、「私だったらこんな所で暮らしたい」という願いをみんなで語り合って作った「大地」という施設で生活しています。職員が、感性や想像力を高め合おうと願いながら、娘たちに毎日支援をしてくれています。そういう中で、本当に豊かな人間関係が築かれています。ここに娘のベストショットがあります。じょうろを持って花に水をやっているのですが、障害の重い娘にじょうろを持たせてくれた職員、そしてそれをカメラに納めてくれた職員もすごいなと思います。

また、娘は呼吸補助装置をついているのですが、2人の利用者が、車いすを自分で動かして娘のところに来て手を取り、泣いたのです。呼吸補助装置がいかめしい機械なので、きっと驚いたのだと思います。「楽になる機械だから大丈夫よ」と声をかけると、ホッとして自分の部屋に帰っていました。また別の知的障害の方が来て、「みんなで見守りますからね」と言ってくださいました。私は、「娘の家族はここにいる」と心底思いました。この価値観が、社会の価値観になってほしいと思えた日でした。

▼家平氏 「障害者問題を考える～共に生きるために」

中3の時の事故で頸髄損傷となりました。それまで、何でも自分でやっていたのが、治らないと分かり、“人生どうでもいい、死んでしまいたい”という想いでしました。けれど、特別支援学校や作業所で、自分よりも重い障害のある人たちが頑張っている姿を見て、マイナス面を見るのではなく、“残された機能を使ってできることは？”と考えるようになってきました。コンピューターの使い方を習って仕事も



し、“社会の一員として参加していく、人の役に立つ”と思えるようになりました。

その後、福祉ホームで自立生活をし、初めて親以外の人に介助してもらう経験をしました。それまで10年くらい親任せにしてきたので、介助される内容は同じだけれども、必要としている介助を自分が伝えられず、“されるがまま”になっていたということに気付かされました。自分が“支援を使う”力をつけることによって、生活のリズムを作ったり、家族がいなくても自立した生活をしていけたりする。

“支援を使って自立する”ことを、一人暮らしをしながら考えることができました。

結婚する時に、“愛する人に負担をかけるのでは”という思いがありました。母親にも10年間介助してもらい、母親の人生を犠牲にしてきたと思っていましたので、できるだけ自分のことは自分でやりたいと思っています。家もバリアフリーに改造し、段差をなくしたり、スロープにしたりしました。ヘルパーさんに来てもらう時にお互い気を遣わないように、リビングを通らずにお風呂にいけるようにしたりしています。寝ている時の身の回りのことも、ベッドサイドにリモコンを置き、口でくわえた棒で押せるようにするなど、自分でできるように工夫しています。

「障害者問題はなぜ起こるのか」に触れたいと思います。

1973年頃は、車いすで電車に乗ろうとしたら、許可書が必要でした。今そんなことがあつたら大問題になりますが、乗車拒否などもありました。初めてガイドヘルパーをお願いした時も、「電動車いすの人は自分で動けるから、利用できない」と言われました。その時に、障害者運動をしていて良かったと思ったのは、「他の市ができているのになぜ?」と訴え、大阪の他の市と同じように、岸和田市でも利用できるようになったことです。

結婚した時も、健常者の家族がいることで介護能力があると見なされて、ヘルパーの支給量が減らされてしまったり、他にも、学校に設置基準がない、就労で最低賃金が保障されないなど、障害のある人が“支援を利用して自立する”ことが保障されない状況がたくさんあります。このように、社会の側がつくる「障壁」があり、ここに問題があるということを、障害者運動に参加して学ぶようになりました。環境が整備されれば、障害のある人も、その人に応じた社会での役割を果たし、自立した生活を送れるのです。障害者問題の克服は、本来は、社会全体が克服していくべきことなのです。

### ▼会場とのやりとりから

Q：家平さんに今までできたのにできないもどかしさが多くあったのでは?母親との関係は?

家平：母親でなくても同じ人に介助してもらっていたら、何も言わなくても分かってしまう関係になります。特に、身体介護は、赤ちゃんのようにすべてやってあげるという状態に、親や家族は陥りがち。小さい時から、いろんな人に手伝ってもらう力をつけられると良いと思います。同じ年代の人達いろいろな活動をして経験を積むというのは、とても大事。

Q：新井さんに一娘さんが、学齢期に集団の中で過ごしたことで、良かったことは?

新井：いろいろな経験をいっぱいさせてもらったこと。娘の中にいっぱい溜め込んでいると思います。

学校にも、皆勤に近いくらい通え、たくましくなりました。

Q：家平さんにいろいろな制度を変えるために運動をしてきた中で、大事にしてきたことは?

家平：ガイドヘルパーを岸和田市でも利用できるようにと訴えた時は、自分だけでなく、「今まで断つ



てきた36人も利用できるようにする」と言われました。一人の要求が、みんなのことを変えるんだという、まさにその事を痛感しました。一度に全部変えられるわけではないけれど、困っている人から実態を伝え、他の人に知ってもらい、変えていくことが大事。

#### Q：福祉労働の専門性について

新井：34年間、みぬま福祉会では、川口養護の先生の言葉「障害の重い子から優先して」という考え方を引き継いで、発達保障を中心に据えて実践してきました。仲間と保護者と職員の3者が対等な関係で今日までやってきました。女性利用者は、自分のシャンプー、リンスをそれぞれ置いていたり、土曜日は晩酌の日で利用者の好きな飲み物を冷蔵庫に入れてあったりします。また、中途障害の方が、娘をお寿司屋さんに誘ってくれたこともあります。30人生活している中で、暮らしている人たちが、「支援される側」だけでなく、職員の橋渡しを受けながら“支援する側”になっているということがあります。職員がいろいろなことを利用者に相談しているということがすごいな、誇りだなと思っています。

#### Q：やまゆり園事件に対して

新井：娘は、人間らしい尊厳のある生活をさせてもらっているけれど、親子心中を余儀なくさせられている人もいます。「家族で支えていくのはもう限界」というニュースが新聞等に出ることもあります。今、障全協では、「家族依存からの脱却を」ということで、あらたらめて「障害児者を持つ家族の暮らしと健康の実態調査」に取り組んでいます。80代の母親が、「人生に疲れた」と記述しています。このような実態を厚労省に訴えていきたいと思います。

また、かけがえのない人生を支える専門職、福祉労働の地位の向上は切実です。人材不足は深刻ですが、福祉現場で働く職員の言葉、「弱者は一方的に守られる存在ではない。この人達への支援を通して自分が問われ、人が好きになれ、受け取るものの方が多いのが福祉の仕事だ」という、この思いに応える処遇の抜本的改善は緊急で重要な課題。そこには、人権意識と専門性を高め、感性や想像力、洞察力が磨ける労働環境が用意されなければなりません。そして、実践が継続されていく、蓄積していく、そのため、働き続けられる条件整備がとても大切だと思います。

家平：「障害をどう捉えるのか」がとても大事。資料表の「健康状態」の下に、「病気、けが、妊娠、高齢等」とあり、誰にでもあり得ること。社会のどこを変えなければいけないのかは、「障害」を捉ることによって分かることができます。着目すべきは、環境をどう変えるのか。そして、困難を乗り越えるのかということが大事。その視点でやまゆり園事件を見た時に、びっくりしたのは容疑者は元職員で、障害者を一番理解していると思っていた人が、「障害の重い人には、生きる価値がない」と言って殺害したこと。根底には、能力主義があります。過度な競争の中で、「どんな人でも人権が保障されるべき」だということを、私たちがもっと発信していく必要があると思います。福祉現場の労働は困難を抱えています。豊かな生活を支えるには、豊かな発想が必要。でも、自分の人権が守られていないような労働環境の中で、人のことは考えられません。そういう背景が解決されないと、虐待の問題なども解決されないので。人権意識をどう高めるのかという学習も必要だし、現場で語れる場がないといけないと思います。もう一つ、優性の問題で言えば、不要な子孫を残さないということで、強制的に本人の同意がなくても手術しても良いという法律が1943年にできました。



これによって、子どもを産めない身体にされた人がたくさんいます。生理の処理や子育てなど、“自分でできない”と決めているのは社会。支援があればできるのに、支援しないで自己責任と言われる現状がまだまだあります。何十年もかかって、ようやくそれが人権侵害だと言えるようになってきました。そういう福祉制度しかない社会の貧困さを変えていかなければ、障害者は価値があるというような社会にはなりません。人間がどう豊かに暮らせるのかということを、障害者問題を通して今問われているし、それを考えることが社会の豊かさに役立つのではないかと思います。



#### ◎受講生から寄せられた感想

- ・家平さんも新井さんも、短い時間の中で淡々と語っておられましたが、ここまで道のりのどれほど遠い、また辛い道のりであったかと思いました。今日のお姿だけではないところに私たちは目を向ければ、今日来ていただいた意味がないのかなと思いました。
- ・貴重なお話をありがとうございました。参加して良かったです。障害のある子どもの保護者としてお話を聞かせていただきました。自分の感じたことを大切に、たくさんの人から学び、子どもが幸せだと思えるように、これからも過ごしていきたいと思います。
- ・普段、障害を持つ方と関わることがなく、今回の講座はとても有意義な物でした。テレビなどでスポットの当たる“美しい”や“悲しい”でなく、家平さんの車いすで家に入る映像や、新井さんの娘さんのお寿司の話など、“日常”を聞けたのが良かったです。自身の周り含め、多くの人に参加してほしいと感じました。
- ・初めてこのような講座を受講しました。自分の知らない様々な活動や体験が分かりやすく話されていました。人間としての会合であった。自分と家庭の生活に役立つ講座だった。反省として、自分は、いろいろな環境の人のことを考えず、自己中心の考え方や生き方をしていたことを再確認した。
- ・たまたまチラシを見て、なんとなく申し込みました。聴講させていただき、本当に良かったと思いました。初めて知ることばかりで、ありがとうございました。50歳近くなつてボランティアをほとんどしたことがない、恥ずかしい気持ちがあるので、人生の後半は、他の方の役に立つことを少しずつしていきたいなと思いました。
- ・仕事で、知的障害の方と電車やバスなどで外出などをしていますが、私達に注がれる周囲からの冷たい視線、舌打ちなど、數え上げたらきりがありません。なので、私は、ものすごく楽しそうに移動支援をしています。そんな姿を見て、少しでも怖くないイメージを発信したいし、自分も少しでもお手伝いしてみたいと社会に思ってもらえるよう、努力していきたいです。
- ・「重い子から優先して」の思想が昔はありました。今はありません。今は障害の軽い子が優先されています。私はそのため、運動をしているのですが、なかなか前進しません。お二人の話を聞いて諦めずに頑張ろうと思いました。自分の子どもを安心して社会に任せることができる世の中になつてほしいです。



## ◆第4回◆

日時：2月24日（日）14：00～16：30

会場：江東区文化センター2階展示室

内容：講演「豊かな生きがい～余暇と社会参加」

　講師：下田 大輔氏(特定非営利法人かるがも花々会理事長)

マルチビタミンコンサート

町田市本人活動の会「とびたつ会」

パネルディスカッション

　松田 泰幸氏(とびたつ会支援者)・堀夫妻・下田 大輔氏

コーディネーター：荒井聰氏

参加者：31名

### ◎講演の主な内容

＜講師の下田さんから、勤務している「かるがも青年部」の活動を通して、障害のある青年

- ・成人の余暇支援が必要とされる背景や“豊かな生きがい”とはどんなことかについて、映像も交えながらお話し下さいました。>



### ▼余暇活動が必要とされる背景と課題

「かるがも」は、放デイ事業所2カ所と、居宅介護、青年の余暇活動、12月から始めた児童発達支援事業とがあり、中学から33歳くらいまでの人が通っています。学齢児が25名、青年も25名で総勢約50名。

青年が、学齢児と同数にまでなってきて、いろいろな意味で危機感を感じ、これから青年の余暇活動をどう進めていくか考えています。「放課後連・東京」の中の「青年部会」でも同じような活動をしているグループと、行政に働きかけたりして、なかなか制度化されない状況ですが、頑張ってやっています。

この余暇支援が必要とされる背景ですが、「障害者権利条約」の30条に、「文化的な生活、レクリエーション、余暇及びスポーツへの参加」とあり、世界的に見ても、これらのことことが大事であり、推奨されていると認知されています。

また、それだけでなく、余暇支援に取り組む事業所は、災害対策・引きこもり対策・犯罪防止などのセーフティネットとしての機能も果たしています。東日本大震災など有事の際に、家族支援も含め、親子共々心身の拠り所となったり、一般就労した人が、社会の厳しい現実に悩んで引きこもってしまったときに心のケアをしたり、犯罪加害者（無意識



もしくは意図せざるになるケースも多い) や被害者になることを防ぐよう、家族支援をしたりする大事な場所となっています。

一方、東京都は、平成28年に、国に対して意見書を出しています。「我々の生活は、日常生活の基礎である家庭や、社会生活の主たる場である学校や職場だけで成り立っているわけではない。むしろ、それ以外の『第三の場』における、友人・知人等との交流こそが、人生に彩りを添えているともいえる…(以下、省略)」。だから、予算措置を講じてほしい。つまり、都もこのような活動が大事だと認めているということです。

### ▼豊かないきがいとは

障害のある方にとって、生涯学習の場があることは大事です。“学習” というと固い感じがしますが、仲間との関わりがあって、楽しみながら行なえる活動があって、自己表現ができる場ということです。

また、社会参加として地域と関わることも大事です。かるがもでは、地域のカーニバルに参加して、歌を発表したりしています。(映像の)この歌は、かるがもに通っていた子が小学生だった時、担任の先生がかるがもの歌を作ってくれ、発表時にはギターも弾いてくれています。かれこれ17年ものおつきあいになります。

障害のある方の成長発達は緩やかですが、じっくりと發揮されていきます。働いたり、趣味を楽しんだり、仲間と過ごしたりすることが、人生に彩りを与えてくれます。“人間”は、人と人の間と書くように、他者との関係、共感というものが必要であり、それが社会性。“共生社会”とはそういうものなのかなと思います。課題としては、障害のある方が、1人で何か行動することが難しく、支援が充分でないことです。彼らにとって、たくさんの経験や出会いが大切であり、長い年月をかけて、生涯に大きな影響を与えられるような、豊かな生きがいになるような支援が必要です。ボランティアの方々が暖かいまなざしで接してくれることが大事だと思います。

### ◎マルチビタミンコンサートの主な内容

「町田市障がい者青年学級」の有志が立ち上げた本人活動の会「とびたつ会」のメンバー30名によるコンサート。活動の中で、様々な学習を行ない、自分たちで創ったオリジナルの歌を披露してくれました。

### ◎パネルディスカッションの主な内容

司会ーまず、堀ご夫妻に。現在の生活と、

「とびたつ会」の活動が生活の中で  
どんな位置にあるのかを話してください。



堀妻一作業所で清掃作業をしています。「とびたつ会」では、みんなと一緒に歌を作ったり、歌ったりしています。

堀夫一仕事は、転々と変わってきました。牧場で、牛と椎茸の仕事。その後は、高齢者の介助。資格がないと、風呂介助ができないということで平成10年に退職しました。それから、麺を作る仕事をしましたが、会社が倒産になってしましました。その後も、クリーニング、佐川急便と変わり、今は、伝票を見ながら荷出しをする仕事をしています。「とびたつ会」は、初めは青年学級で、高坂さんの下でリーダーをしていました。「いずれはおまえがやるんだぞ」と言われて。「とびたつ会」でも、みんなのまとめ役をしています。今は、結婚してグループホームに住んでいます。

司会一「とびたつ会」は、学習や歌作りなど、いろいろやっていますね。自分では、どこに力を入れていますか？

堀夫一学習会でいろんな所に行って、新曲を作ったりします。僕は、出かけるよりも、調理がしたいけれども、支援者の人数の関係で「次回ね」ということもある。新曲は覚えるのが難しいし、曲の途中で何かしゃべるのは僕しかできません。5月11日に、町田でコンサートをやるので、ぜひ見に来てください。

司会一まとめ役は、大変ですか？

堀夫一できるだけ自分たちでやっているけれど、予定を決める時は、松田さん中心でやっています。メンバーの半分は、電車で自由に行ける人ではないので。

司会一仕事が忙しくて、「とびたつ会」ができないということはないですか？

堀夫一年を取って膝・腰・肩が痛くなってきたので整骨院に行ったり、奥さんと買い物に行ったり、今日は奥さんの誕生日なので、グループホームの人と町田についたら待ち合わせをしています。

堀妻一日曜日に活動が多いので、特に仕事に影響はないです。家事もしなければならないので、土曜の活動には参加していません。洗濯をたたまないと世話人さんに言われてしまうので。

堀夫一世話人さんは、真面目にやっていれば怒らないです。仕事を休むと注意されるね。

司会一生活がにじみ出ていますね。仕事と余暇を両立させている様子がうかがえますね。「とびたつ会」の松田さんから一言お願ひします。

松田一「とびたつ会」は、青年学級の卒業生から作られた「本人活動」です。青年学級は、町田市教育委員会が主催する公的な活動ですが、人数がいっぱいになってしまったこともあります、また、いろいろな学習をして触発されたこともあり、卒業した人が「とびたつ会」を立ち上げました。25人くらいのメンバーで学習や調理など行なっています。支援者は、ボランティアです。5月のコンサートは19回目で、地域にアピールしていくこうということから始まりました。



司会一最後に、下田さん一言お願いします。

下田一問題提起というか、青年余暇の問題がまだまだ良い方向に向かっていないことをお伝えします。先日、かるがもに来た議員に、都から意見書を出したけれども、国の方で話が進んでいないということを伝えると、「まだ国の方は手つかず」と言われ、残念に思うと同時に、まだまだ問題提起していかなければならないなと思いました。地域に出ていって、一般の方たちを触れ合ったり、障害者理解ということを訴えていきたいと思います。

司会一今、放課後等デイサービスの事業所が、サービス提供の場と見るのか、子どもの発達の場と見るのか等の問題はありますが、ものすごく事業所数が増えています。この放デイを卒業する子どもが今後どんどん増えていく中で、不十分な状態で社会参加しているような状況が生じてきています。行政としても、そういう状況を認識して、政策に結びつけていってほしいと思います。

松田一教育の方では、文科省が、「プログラム開発事業」を74万予算で今年度から行なっています。市区で受けているのは町田市青年学級のみ。学校教育の方では、「専攻科」で18~22歳対象に学びの場を保障しています。福祉との連携がなかなか取れていなっていますが。

司会一行政の姿勢次第で、全体として問題はありますも、利用できる施策は個々にはあって工夫が必要ということですね。でも、そもそも「この問題について取り組む」という行政の姿勢がないとできないので、住民や当事者が声を挙げていくことが必要ということが、今日確認されたと思います。

#### ◎受講生から寄せられた感想

- ・「かるがも青年部」の活動の映像で、自宅とは違った場所で、「ただいま！」と帰れる場所があり、「安心」「楽しさ」を皆と一緒に共有できる場があることはすごく嬉しく思いました。その中で、いろいろな経験を積んでいくんだなと感じました。コンサートのオリジナルソング、とっても良かったです。皆がその時に思ったこと、その時代のことを皆で考え作り歌うことを全体でやることで、一体感を感じ、大きなパワーを感じました。ディスカッションでは、ご夫婦のリアルな話を聞いて、GHや施設の方々の協力を得て、ステキな夫婦生活を送っているんだなと感じました。
- ・「とびたつ会」の方々のディスカッションの時間がとても楽しかったです。普段の活動時の姿が垣間見えるようなお話、また文科省絡みでの卒業後の子どもたちへの支援の形などを考えるにあたって、大変興味深い話を聞くことができて良かったです。



- ・下田さんの話を聞いて、作業所等終わった後に、1人で過ごすことができない青年たちの第3の活動の場の重要性を改めて感じました。また、親の就労についても、第3の場が確立することで保障され、本人、家族共に生活が充実していくことを感じました。青年の活動事業についても、国として良い答えを期待しております。パネルディスカッションの時間が短かったですが、3部を通して内容が充実していて、参加して本当に良かったです。
- ・余暇の必要性として、災害や引きこもり対策、犯罪の防止などは、新たに知ることができました。また、余暇活動でどんなことに取り組んでいるのか、写真や映像で知ることができ、たいへん勉強になり、今回だけの参加でしたが、お話を聞けて良かったです。
- ・障害者の余暇の重要性を改めて感じました。「かるがも」で行なっているとりくみが斬新で面白いと思い、印象に残りました。様々な施設で同様に青年期の余暇支援が進んでいくよう、法が整備されてほしいです。コンサートは、障害者の方々が、とても活き活きとしていて、楽しそうな表情を見て、こっちまで楽しくなるようなコンサートでした。
- ・下田さんのお話の中で、ボランティアで最初に関わった人に、「生きている幸せを忘れるときがある」と言われたこと、犯罪加害、被害防止のお話で、「“やりたい”という気持ちを汲んであげられる人がサポートすること」という言葉が印象に残りました。
- ・今日は、とびたつ会の皆さんコンサートが一番心に残りました。元気をもらいました。ありがとうございました。この2年間、ボランティア講座に参加させていただきました。皆で仲良く、助け合いながら生きていくことの大切さを改めて実感させられました。
- ・障害を持つ方々の可能性と、それを十全に発揮することのできない社会の現状が少し見えた気がしました。貴重なお話をありがとうございました。
- ・「かるがも」「とびたつ会」の活動内容は、とても興味深いものでした。ご結婚されてGHにお住まい…なんてステキなんでしょう！そんな応援が、これから私もできたらいいな～と強く思いました。学校を卒業してからの余暇活動は、本当に支援が必要だと思います。誰もがやりたいことができ、行きたい所に行ける世の中にしていきたいですね。
- ・かるがも青年部の活動について聞けて良かったです。他の施設の様子を映像で見ることができ、自分の職場と比べて見られたのも面白かったです。青年たちの楽しそうな顔を見て、そういう場をもっと増やしていかないといけないなと思いました。コンサートは、全てオリジナルで、素直な思いが込められていて、とても響きました。楽しそうに歌っている姿を見て、元気をもらいました。コンサートなど、障害のない人にももっと認識、理解をしてもらえるよう、どんどん開催していければいいなと思いました。ディスカッションでは、リアルな本人の体験談、意見を聞き、賃金が少なくて辞めたなど、問題はいっぱいあるんだなと感じました。それでも前向きに仕事を探し、結婚し、たくさんの活動に参加し、パワフルでとても良いなと感じました。



## 体験講座

### ◆第1回◆

日時：6月30日（土）13：00～17：00

会場：まつぼっくり子ども教室

内容：体験「学齢児の活動に参加」

※体験の前後30分ずつを打ち合わせと振り返りに当てる。振り返りの時間には、発達相談員の荒井聰氏がアドバイザー参加。

参加者：8名

#### ◎体験内容

13：00 打ち合わせ。活動の流れや注意事項、担当につく子どもの情報等の伝達

13：30 活動開始～始めの会。一人一人名前を呼び、体調等を全体で確認

14：00 出発。半蔵門線で大手町～和田倉公園へ

噴水広場休憩～おやつ

16：30 終わりの会～保護者への引き継ぎ

振り返り。感想などを出し合う

17：00 終了

#### ◎受講生から寄せられた感想

- ・バギーを押すのは初めてだった。車いすより押しづらい。水分をとるときに、コップをわざと落としたり、私の首にかけていたタオルを引っ張ったり、楽しんでいたので、良かった。
- ・初めて障害のある子と関わるので、初めは緊張していたが、最近遊んだ2～3歳の甥っ子よりも大変ではなかった。担当の子が高校生だったので、何か話しかけてもあまり返事がないこともあり、もっと積極的に話しかけた方がよかったのか、その辺がまだよくわからなかった。もう少しハプニングがあったりするのかと思っていたが、みんな落ち着いていた。
- ・担当の子はよくしゃべる子で、パソコンやメールも自分でできる子。彼から、学校で清掃をしていること、地下鉄のことなど、よくしゃべってくれた。地図を見て、自宅のマンションまでの行き方を伝えてくれたり、短い単語のときは、意思が通じた。
- ・担当の子は、手を叩いて「ラララ～」と歌っているので、何の歌が好きかなと思って、いろいろ歌つてみた。トトロの♪さんぽが反応が良かった。楽しんでもらえたかなと思う。時々みんなの輪から離れて一人で行ってしまうことがあり、どうしたらいいんだろうと思った。

#### ◎アドバイザーから

暑くて、子どももバテ気味だったが、ハプニングもなく、落ち着いていた。新しい人がいて、子どもたちも良いところを見せようとしたのかもしれない。

「一人で行ってしまう」子については、他の子より自己主張が弱く、追いかけてほしくてこっそり抜



けることが普段からある。独占したくてやったのだと思う。また、「積極的に話すべきか」ということに関しては、人ととの関わりの中で、コミュニケーションをどう作るかというプロセスが大切。最初の出会いなので、「暑いね」とか「楽しそうだね」とか自分の思ったことを言えばいい。共有できるものがあれば関わりが出てくる。

## ◆第2回◆

日時：7月29日（日）10：00～17：00

会場：まつぼっくり子ども教室

内容：体験「エブリ（青年・成人期）の活動に参加」

※体験の前後30分ずつを打ち合わせと振り返りに当てる。振り返りの時間には、発達相談員の荒井聰氏がアドバイザー参加。

参加者：5名

### ◎体験内容

10：00 打ち合わせ。1日の活動の流れや注意事項、担当につく青年の情報等の伝達

10：30 活動開始～始めの会。一人一人名前を呼び、体調等を全体で確認。

11：00 出発。都営新宿線で本八幡～現代産業科学館へ  
昼食～館内見学～おやつ

15：50 終わりの会～保護者への引き継ぎ

16：10 振り返り。感想などを出し合う

17：00 終了

### ◎受講生から寄せられた感想

・昨年も参加していたが、青年に関わるのは初めての体験。身体も大きく、少し緊張したが、以外と素直で、移動も止まることなく、スムーズに付いてきててくれた。自分が高齢なので、気を遣ってくれたのかも知らない。館内は、あまり興味がなく、外に出たがったり、座り込んだりしていたが、無理に引っ張らずに付き合っていた。お弁当は、いつもは白飯が残りがちとのことだが、今日はよく食べていた。水分をあまり取らず、汗をかきづらいので、排尿が少ないのが少し気になった。

・昨年からの体験で、何度か関わったことのある青年が担当だった。調子が良く、機嫌も良かったが、館内の展示コーナーのブランコに乗りたがっていたが、混んでいて乗れず。怒ることはなかったが、残念そうだったので、展示コーナーの自転車に誘うと、思い切りこいで良い表情をしていた。帰りは、暑さが厳しく、水分もたくさん摂ったがしんどそうだった。

### ◎アドバイザーから

台風が心配だったが、事故なく行なうことができて良かった。今日は全員が、昨年から引き続いで講座に参加してくださっている方々だったので、皆さん慣れた感じで、主体的に関わってくださっている。

